神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Farewell Wishes to Prof. Yoko Tsujimoto

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 難波江, 仁美, NABAE, Hitomi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2079

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



送る言葉

難波江　仁美

辻本庸子先生は、1989 年（平成元年）に本学に就任されました。以来、四半世紀にわたってアメリカ文学の担当教員として本学の教育に尽力され、また学会においても日本アメリカ文学会本部事務局幹事やマーク・トウェイン学会学会誌の編集委員長として活躍されました。

2016 年 1 月 28 日の辻本先生の最終講義 “Rewriting History: Toni Morrison’s *A Mercy*”（歴史を書き直す：トニ・モリスンの『マーシィ』）は、先生の文学への、そして教育への熱い思いに溢れ、大教室をうめた学生そして教員に感銘を与えるものでした。先生は、アフリカ系アメリカ人ノーベル賞作家トニ・モリスンの作品が、アフリカ系アメリカ人として初めてバラク・オバマが大統領に就任した 2008 年に出版されたことに言及され、米国における奴隷の歴史を 17 世紀に遡るこの小説と 21 世紀の今とをつなぎ、「書くこと」「想像すること」そして「歴史を書き直す（修正・創造）こと」というモリスンの作品に通底する重要なテーマにダイナミックに迫られました。文学を読むことが歴史や文化の知識を得る手段、あるいは娯楽にとどまらず、作品を読み共鳴する経験が新しい視座を拓いていくきっかけとなることを実践的に語られたのです。また作品で言及されるアメリカの国鳥でもある鷲のイメージに注目され、鷲に変身して恋人を攻撃する女性登場人物の暴力性が、子を守る母鷲の自己防衛の裏返しであり、自由への飛翔を促す力ともなること、そして社会における様々な呪縛から自らを解き放つためにはこの鷲に象徴されるような暴力性が必要となることを論じられました。そしてこの「暴力性」と「越境性」の問題こそ、まさに辻本先生が取り組んでこられた研究テーマなのです。

先生は、19 世紀アメリカン・ルネッサンスを代表するハーマン・メヴィルやナサニエル・ホーソーン、そして国民作家マーク・トウェインといった男性作家を中心に研究をはじめられましたが、彼らをアメリカ文学の主流作家と規定したとたんに排除されてしまう女性作家やアフリカ系アメリカ人作家、さらにアメリカの周辺国カナダの作家にも目を向けられ、研究の幅を広げられました。例えば、メルヴィルやホーソーンと同時代のストウ夫人、マーク・トウェインと同時代のケイト・ショパン、さらに 20 世紀

のアフリカ系アメリカ人女性作家ゾラ・ニール・ハーストンやトニ・モリソン、南部女性作家フラナリー・オコーナー、カナダ人女性作家マーガレット・アトウッドなどです。先生は彼女らをアメリカの父権主義や奴隷制といった社会規範に何らかの形で揺さぶりをかける転覆力という暴力性を内に秘めた作家として位置づけて再評価されました。とりわけ近年先生は、ジェンダー、人種、国籍といった個人を規定する様々な社会の枠組みを乗り越える越境性の力学を文化史的、歴史社会学的視点を導入することで明らかにしようと研究をすすめておられます。現在執筆中の論考は、アメリカで最初の小説ともいわれるピーター・マルコウの『フィラデルフィアのアルジェリア人スパイ』(1783) における境界侵犯についてであると聞いています。先生の研究テーマは、退職という新しい船出を機に北アメリカからカリブ海領域へとさらなる越境へと向かっているようです。

辻本先生は、発想力やマネージメントにもすぐれておられます。日本アメリカ文学会におけるシンポジウム「神話のスパイラル―アメリカ文学と銃」(2004) は刺激的なテーマでした。今から思えば先生の暴力性と越境性という一貫したテーマが明白に現れていた企画で、同名の論文集としてもまとめられました。今ひとつの画期的なシンポジウムは「あめりか・いきものがたり―動物表象を巡って」(2011) です。人間と動物、自然、環境、メディア、人類学といった様々な視点からアメリカの「いきもの」と「ものがたり」を検証する企画です。このシンポジウムも『あめりか・いきものがたり–動物表象を読み解く』として論文集に編纂されました。何より「ものがたり」を「いきて」そして体感するというテーマには、辻本先生の「楽しまなければ文学でない」という基本的な思いが読み取れます。

また先生はマーク・トウェイン学会の研究史『マーク・トウェイン』の編集長を務められました。新しい企画の考案、また若い (しばしば女性の) 研究者の起用といったことにも貢献されました。そして本学での最後の 3 年間は、日本アメリカ文学会本部事務局事務局長として学会の要となって尽くされました。

常に辻本先生がいらっしゃるという安心感がわたしたちにはありました。でもそれを今、越えなければなりません。わたしたちにできることは、先生の残された文学研究・教育の伝統を引き継ぎ、それを次世代に伝えていくことです。先生には、大学の校務から解放され、ますます自由に研究を、そして人生を楽しんでいただきたいと思います。退職の年である 2016 年度には学会でのシンポジアム発表も続くと聞いています。越境、境界侵犯を常に体現して下さる辻本先生。ますますのご健康とご活躍を祈念いたします。